

大阪外国語大学

南十字星

インドネシア語
同窓会

2005年秋 創刊号

発行 大阪外国語大学南十字星会
連絡先 大阪府池田市五月丘2-5-113-402
電話 072-753-1693
Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

誇れる伝統

夢は脈々と受け継がれて

会報創刊を喜ぶ

南十字星会会長 山口 寛



南十字星会とは、大正11年開校の大阪外国語学校馬来語科を母体に、大阪外事専門学校を経て、戦後の学制改革で昭和24年に新制大学として発足した大阪外国語大学インドネシア語学科・専攻の同窓会である。当初は「南方同志会」の名称で卒業生・在校生を一丸とした、いわゆる語部の縦の組織だった。戦後「南十字星会」と名称を改め、会の中心を卒業生において現在に至っている。この間、第二次世界大戦をはさんで母校も幾多の辛酸を舐めてきたが、卒業生は1,600余人となり、多くの逸材を世に輩出した。これは語部の誇りでもある。

本会を語るに、生みの親でもあり半世紀の長きに亘り教鞭を取られ、千余人の子弟教育に尽くされた恩師、故内藤春三先生の存在を忘れることはできない。先生には教育のみならず、就職の斡旋や結婚の世話まで親身になって面倒を見てもらった者数知れずである。先生の顔が長かったことに因んでつけられたあだ名が KUDA。温和な人柄に先生を慕う者多く、南十字星会の拠り所となってきたわけだが、こと学問に関しては酷しい考え方もった信念の人だった。「志をたて、外語に入学した以上は専門語の習得に全力を傾注

すべし」という言葉が、とても印象に残っている。

かつて、南進の志を抱いて外語に入学せる戦前・戦中世代。戦後の混乱時代から経済大国への道程を、海外雄飛を夢見て外大に入学した企業戦士と言われる世代。そして今また、グローバル化時代を迎えて外大を志願する新世代と、海外に賭ける夢は終始変わらず脈々と受け継がれていることに、語部の伝統を見る思いである。

しかしながら、戦後60年経った今日、母校をとりまく環境にも大きな変化が見られる。今春の新入生15人中、実に13人が女性という女子大化現象。2007年度にも予想される大阪大学との経営統合問題や大学全入時代の到来。それらに対応した同窓会活動の見直しを今さらながらに痛感するものである。特に、卒業生の記憶も日々に薄れ、体験談も風化してゆく中であって、本会挙げてのアチエ募金活動が契機となって同窓生間の情報交流が進み、長年の懸案だった会報誌が創刊できたことは無上の喜びと言える。願わくば、南十字星会報が同窓生交流の場として、末永く先輩から後輩へ受け継がれてゆく語りべ的存在となることを期待するものである。 ('58卒 大6)

歴代会長

(敬称略)

1949~1979	石崎 次雄 ('26卒 専2) = 故人
1979~2004	野尻 庄蔵 ('53卒 大1)
2004~	山口 寛 ('58卒 大6)

母校とOB・OGを結ぶ接点に

南十字星会関東支部長 堀田 実 ('63卒 大11)

南十字星会の会報が創刊される運びとなり、インドネシア語を学んだ者の一人として嬉しい気持ちでいっぱい。ご担当の皆様のご尽力に感謝申し上げます。



関東支部も昭和6年卒の大先輩から平成16年卒の若手OB、OGまで総数約250人を抱える大所帯です。運営も簡単なものではありませんが、最近は若手の幹事を中心に年1回の懇親会開催と会員名簿の刷新を主たる任務とし、会員の皆様の連絡に当たっています。

以前は会員の大半が男性。プログラムも男性中心で十分賄えました。しかし、女性の比率が増えてきて現在では20%強が女性会員です。従って会の運営や行事の内容に新たな配慮が必要となってきました。先般行われた今年の懇親会でも、参加者総数29人のうち7人が女性でした。会の雰囲気の様変わりしています。私自身のことを申しますと、大学を卒業して40年以上経

ちました。仕事に追われている間は、母校のことを振り返る余裕もなく、情けないことではありますが“仕事人間”でした。仕事を離れた現在、母校のことがやたらと気に掛かり、時折箕面の校舎を訪れています。そして、ある時は自分が属していた陸上部の現役の選手達と話し、ある時は南十字星会総会で学生達の話聞き、また、ある時は咲耶会を通じ先生方と意見を交換、自分が昔学んだ母校の現状を知る喜びを味わっています。

現在の母校は昔に比べ、所在地、男女の構成比、規模など全く違ったものになっています。この会報は現在の学生諸君を含めた母校の情報を提供して頂ける情報誌であり、母校と我々OBを結ぶ重要な接点と言えるでしょう。我々の後輩達が現在どのような学生生活を送り、何を目指し、何に悩んでいるかを知ることが出来ます。それにより我々OBの母校に対する協力がどの辺にあるかを知ることが出来るでしょう。本会報が今後はますます充実したものになるよう願ってやみません。

「心の支援も大切」

大阪外大アチェ支援学生の会
吉田隆之 代表

アチェの被災地を自分の目で見た4年生の吉田隆之さん。帰国後、4月7日に「大阪外大アチェ支援学生の会」を結成した。5月に学生会館でアチェ写真展を開き、7月に学内の夏まつりでピサン・ゴレンの出店。カンパや収益金をアチェ募金に加える。HPを開設し「アチェ新聞」を発刊した。

「様々な活動を通じて、被災地はまだ復興の中であることを忘れな

いでいてもらいたい。それが会の目標です。だから津波の“存在”をアピールし続けています」

会のこと産経新聞に取り上げられ、JICAの広報誌「国際協力」9月号に草野満代さんのインタビューページで紹介された。

9月17日から23日までアチェで現地支援。出発前こう話した。

「支援活動は、現地住民のお手伝い、NGO訪問、津波孤児たちのいる学校訪問など。学校とは継続支援の話をしていて、冬にまた訪れます。精神的なサポート、心の支援も大切です。学生でも出来ることをもっともっと...」



南十字星会として初めて本格的に取り組んだ社会活動。今その成果が実りつつあります。会の皆さまにご協力いただいた「アチェ支援募金」です。かつてない力強い結束が、懸案だった会報づくりにもつながりました。支援については進行形の部分が多いのですが、幹事会として簡単に経緯を報告、改めてお礼申し上げます。

「アチェ募金」支援の熱き思い

2004年12月26日に起きたスマトラ沖の大地震・インド洋沿岸の大津波は、23万人を超す犠牲者を出した。被害が拡大する。惨状のツメ跡もひどい。世界中から救援の手が差しのべられた。インドネシアの中でも震源に近いアチェ州に被害が集中、死者・不明者は17万人近くにのぼった。

「南十字星会として何か支援ができないか」。会が動き出した。大学側でも松野明久教授らが行動を起こしていた（3月初旬に現地視察=下に写真、4年生の吉田隆之さんが同行）。

連絡を取り合い、4月2日に幹事会開催。松野教授から報告を聞き、意見を交わす。全員が募金運動実施に賛成。趣旨を関東支部に連絡、賛同を得て、募金協力呼びかけの趣意書を会員に発送した。咲耶会にも協力要請。

支援は南十字星会の単独ではむずかしかった。協力体制を組もう。松野教授が代表を務める「日本インドネシア NGO ネットワーク」(JANNI) のニーズ対応型のプロジェクトに、

大阪外大の名を冠した委託事業として組み込んでもらうことになった。多くの会員が募金に「ひとこと」を添えてきた。幹事会世話役らがその言葉に励まされた。募金が目標の百万円を突破する。

7月2日に2回目の幹事会を開催。支援先は「ポチュット・ムティア財団福祉女性技能センター」。被災者を中心とした女性の雇用拡大のため、縫製・料理など様々な分野の技能を習得できる作業所の完備に充てる。一部を9月に支援活動する学生の渡航費補助に。

総額1,046,456円をJANNIに寄託。7月20日付の領収書が届く。

「会報など発行しているようでしたら、発送を」。そんな会員の声の後押しもあって、7月の幹事会では懸案だった会報づくりを決定した。





キャンパス便り

外大インドネシア語の現況

インドネシア語専攻語代表 松野明久



新しい体制



最近の外大になじみのない方のために、今の体制を簡単にご報告しておきたい。今外大は「国立大学法人」であり、われわれも「教官」ではなく「教員」となった。インドネシア語は日本人

教員 3 人、外人講師 1 人の体制で昔と変わらない。

外国語学部は国際文化学科と地域文化学科の 2 学科となり、東南アジアの 5 つの言語は東南アジア・オセアニア地域文化専攻としてひとつの専攻になった。インドネシア語はもはやインドネシア語学科として自立した専攻ではなく、東南アジア専攻の中の一言語という位置づけだ。インドネシア語の定員は 15 人で、プラス 5 人が国際文化学科から振り分けられてくる。合計 20 人が 1 年・2 年のクラスをともにする。3 年になると国際文化の学生はそれぞれ別の専門に入っていく。

勉強の内容はさほど変わっていない(のではないだろうか)。1・2 年生は語学をびっちりやらされる。3・4 年生は以前と比べ語学の授業は減った。また卒論も必修ではなく 2 科目で代替できる。

外大は博士課程を設置した。これから博士号を出すなど、研究者を育成していくことが課題となる。

嘆かわしくなどは決してない!

学生の 8 割が女子ですと言うと、往年の卒業生たちは目をまるくする。私が学生だった 1970 年代は男女半々の時代だった。それから女子が増え始め、今ではインドネシア語に限らずほとんどの専攻語・専攻で女子が 8 割程度となっている。学生だけではない。インドネシア語は教員 4 人のうち男性は私 1 人。大阪外大は国立大学法人の中では女性教員の割合が高いトップ 5 に入っている。

女子と男子に基本的能力の差はない。個人差の方が大きく、男女差を語る意味はない。国連など国際機関で働く日本人の大半が女性で、私が最近東ティモールで会った国連関係機関の日本人女性は、東京女子大、津田塾大、東京外大などの出身。能力を男性と平等に評価される国際機関は就職先としていい。

したがって嘆かわしいのは、有能な彼女たちを採用しようとしないうとしない日本の会社の方ではないだろうか。女性が働きやすい職場をつくり、女性が能力を発揮できるようにするために、是正すべきことは多い。外大の発展は、日本が女性の働きやすい社会となるかどうかにかかっている。

プロフィール

まつひのあきひさ = 1956 年熊本県生まれ。80 年東京外国語大学外国語学部インドネシア語学科卒。82 年同大学院外国語研究科アジア第 3 言語専攻修了のあと国立国語研究所客員研究員。83 年 4 月大阪外国語大学インドネシア語学科助手。講師、助教授を経て 2003 年 1 月アジア第 2 講座教授に。大阪東ティモール協会事務局長、日本インドネシア NGO ネットワーク (JANNI) 代表。著書に『インドネシアのポピュラー・カルチャー』『東ティモール独立史』など。

農村ホームステイ

ボゴール近くの農村でホームステイを始めて今年で3年目。村の人も慣れてきて、学生たちの訪問を楽しみにしている。

学生はというと、一生懸命インドネシア語を話して疲れ、水浴びをし、慣れないものを食べて暮らす。熱を出したりおなかをこわしたり。しかし1週間後には、村のお母さんたちと涙の別れとなってしまう。

このプログラムは community-based tourism の練習のようなもので、村の暮らしを経験するとともに、近くの国立森林公園に1泊し、村の産業である鍋リサイクル業を見学する。いつの日か村の人たちには一般の旅行者を受け入れるようになるだろうか。ジャカルタ集合解散の1週間プログラム(全食付)で1人25,000円。

増える留学

4年間堅苦しい語学書と悪戦苦闘する時代は過ぎた。今やインドネシアは簡単に行けるからだ。1年間勉強して早速旅行し、2年生でホームステイし、3年生で半年から1年の留学に行く、というのはごくふつうのパターンになった。インターンとしてちょっとした仕事の経験をインドネシアで得る学生も生まれている。

また、インドネシアについての情報も昔に比べれば簡単に手に入る。インドネシアの新聞はホームページで見れるし、レポートや卒論のネタもインターネット頼み(これはよくない)。学生の関心はますますもって等身大の現代インドネシア社会に向いており、時事的、短期的な方に流れやすい。教員としてはもっと歴史を見据えたスパンの長い観点を求めたいのだが。

ただ、学習の動機づけが現実の体験から生まれてくる可能性は非常に高くなっており、それは喜ばしい、というか当然のことだろう。学問の方がめまぐるしく展開する現実社会をリアルタイムでは追いつけないの



写真は(左)トウモロコシのでんぷらづくりを習う(下)「クルブック競争」に学生たちも参加した
※今年九月のホームステイから



で、その分、学生の関心をつなぎとめるのが難しくなっている。

果たしてそのギャップを大学として埋められるのか。外大のような大学の課題ではないだろうか。

問谷祭

今年の大阪外大「問谷祭」は11月11日から13日まで。「語劇祭」をはじめ多彩なイベントが企画されている。インドネシア語劇「Dayang Sumbi」(主人公の名前をタイトルに)は

初日の午前11時開演。同窓会コーナーには、同窓生が歓談できるスペースが設けられる。咲耶会や各語科の会報、大阪外大新聞などが置かれ、外大出身者の著書も紹介される。



先人の苦難の足跡を経て今我々は...

南十字星会ジャカルタ支部長 内原正司 ('64卒 大12)

ジャカルタ滞在が長い友人から昭和53年発行の蘭印時代の邦人の足跡を記した『ジャカルタ閑話』を借り、我々の先輩の足跡を辿ってみた。

14-17世紀に倭寇、八幡船、戦国武士やジャガタラお春、御朱印船などがインドネシアに渡っている。長い鎖国後、明治維新で海外渡航の扉は開かれたが、先導役は女性達だった。明治末期には南方一帯で5,000人、蘭印だけでも1,500人、シンガポール在留邦人1,000人を数えたが、うち男子は40人しかいなかった。女性は唐ゆきさん、大和撫子、ラシャメンと言われ、新天地で日本の国を紹介し、東南アジア交流の基礎を築いて行った。

これに続いた男子は賭博本業の吹矢の連中。そして、真面目な青年達が売薬や雑貨を苦力に担がせ、炎天の村々を行商して歩いた。

初期の進出は無一文からこの行商で出発した人が多い。成功者は各地に定着し“トコジャパン”の草分けとなった。トコジャパンは蘭印の名士と家族ぐるみで交際、民間外交の実をあげ、親日の根が広がった。全盛期、その数1,000軒にも及んだ。

明治42年にバタビア日本領事館が開設されるまでは、シンガポール日本領事が諸手続きを扱った。邦人の仕事は雑貨商、洗濯屋、旅館、玉突屋、売薬行商人、貸馬車など。同年の記録では在留邦人は男性166人、女性448人。当時、人馬の交通は頻繁、車馬絡駅、汽車の発着などその文明の程度は我が国を凌駕していたという。

商社の進出は大正5,6年頃から。日本人小学校の開設はスラバヤが一番早く大正14年。次いでバタビア、スマランは昭和3年、バンドンが昭和8年。昭和14年

の国勢調査によれば、全インドネシアで在留邦人6,469人、うち女性3,169人。出身地は東北地方、九州、沖縄が目立った。

昭和16年太平洋戦争が勃発。領事の勧告でほとんどの日本人、日本企業が事業・財産を一切放棄して引き揚げ、長年の努力は水泡と帰した。さらに宣戦布告とともにオランダ官憲に踏み込まれ、多くの日本人は着の身着のまま収容所に護送された。

戦後昭和22年、熊本丸による最終引き揚げが完了す

るが、残留者は戦犯容疑者1,250人、弁護士、世話役13人、行方不明約1,000人。因みに蘭印関係で285人が戦犯として現地処刑された。

その後、独立戦争、スカルノのオルデラマ、スハルトのオルデバル、1998年の民主化、革新を経て今日に至っている。



先輩諸氏の苦難の足跡を経て現在ジャカルタ支部幹事団の面々は明るく元気で毎日を送っている。咲耶会を年に一度、南十字星会ジャカルタ支部会と称して月一度の頻度で安くて旨い所を若き女性幹事に選択してもらい、晩餐会を開催している。

松野教授の要請に基き高岡幹事を中心に学生のインターンシップの受け入れも行っている。

《幹事団メンバー》

支部長：内原正司（'64卒 大12）

幹事団：泉三郎（'69卒 大17）、大島庄次（'86卒 大34）、高岡容子（'87卒 大35）、川久保美香（'00卒 大48）

写真は後列左から泉、大島。前列左から川久保、内原、高岡

寄稿

Apa & siapa

「踊る阿呆」

田中 千晶 ('90卒 大38)

バリ舞踊を学び始め、今年6月で19年。ここまで続けていようとは夢にも思わなかった。教室を開き、同じく今年6月でちょうど10年。9年、10年、通い続けている生徒さん達がいる。不思議だ。

「どうしてバリ舞踊を始められたのですか？」とよく尋ねられる。よほど衝撃的な出会いがあったのだろうと期待されるのだが、

何のことはない、テレビで見たのだ。1985年にバリ島のプリアタン村から舞踊団が来日し、今では伝説的になった公演があった。私はNHK教育テレビの芸術劇場という番組でそれを見た。「へ～、すご～い。バリ島の踊りってよく聞いてたけど、こんななんやあ。すごいなあ。バリ島かあ。インドネシア。ふ～ん...」

浪人中の私は第一希望が大阪外大だったが、どの語科を受験するか悩んでいた。「ジャワ更紗、ジャワの影絵、ジャワカレー、みんなインドネシアかあ。芸術とか文化がいっぱいや。貿易も日本と盛んやし、インドネシア語学科、いいかも...」と受験した。入学後、志望動機を聞かれ、そのような話をしたところ、1年上の先輩がバリ舞踊を習っているとのこと。大阪でバリ舞踊を教えている人がいる！びっくり仰天！！そもそもバリ舞踊のように難しそうなものが習えるのか？！習って踊れるようになるものなのか？！でも、教えている人がいて、習っている人がいるなら、踊れる



ようになるんだろう！じゃあ私も！！と始めてみた。

学生時代は週2回お稽古に通い、色々な舞台でも踊らせて頂いた。遠くは名古屋や福岡まで。様々な人とも知り合い、いい経験を積ませて頂いた。4回生になり、就職活動、卒論製作、そしてバブル全盛期に大手商社に就職。2年ほど踊りから遠のくことになる。

が、ひょんなきっかけでまたお稽古を再開してから火が点いた。賭けのつもりでインドネシア教育文化省のダルマ・シスワ（政府給費奨学金制度）に申し込んだ。受かってしまった...。合格通知を手にしてから更に迷いに迷ったが、93年、清水の舞台から飛び降りる覚悟で会社を辞め、バリ島に舞踊留学した。それから今まで、踊りを生活の中心に据えて日々を過ごしている。

今でもバリの先生の下へ通い、研鑽を積み続けている。世界的に有名な人間国宝のような方達が、実に気さくに教えて下さる。踊りばかりでなく、人として学



ばせてもらえることも多い。

自分を見ても、他の踊り仲間を見ても思うことは、人間の才能の素晴らしさである。真摯に学び続ければ、どこまでも伸び続ける。「芸を極めるのに、一生では足らなんだ」。文楽のある人間国宝の方の言葉である。これからも精進を続けていきたい。

(バリ舞踊プルナマ・サリ主宰)

<http://homepage3.nifty.com/purnamasari/>

インドネシアにおける日本語教育



磯浦美恵子（'58卒 大6）

ブンハッタ大学で5年
ハサヌディン大学で2年

言葉だけでなく“心”を

「一粒の種」がしっかり実を結ぶ

私は2002年から2004年の2年間スラウェシ島・マカッサルの国立ハサヌディン大学にJICA(独立行政法人 国際協力機構)より派遣されましたが、それ以前の1990年からの約5年間、西スマトラ州パダンのブンハッタ大学で日本語教育に携わりました。

パダンへ

当時、日本語学科は北スマトラのメダンに国立の北スマトラ大学や専門学校などがあり、日本政府の援助も十分受けていましたが、西スマトラ州には全くありませんでした。パダンはスマトラの真ん中、赤道直下にあって海拔ゼロ、暑さと食べ物の辛さ(Masakan Padang)で有名ところで、ミナンカバウ族(母系社会)として教育水準も高い地域です。大学から文学部に日本語学科を開設してほしいとの要請を受け、赴任しました。

第1期生は50人でスタート。先

生は北スマトラ大学、パジャジャラン大学、ジャカルタ大学から来てもらいましたが、学力が低く学生と一緒に初歩から指導しなければなりません。教科書、辞書、ビデオ教材、ビデオデッキ、コピー機などあらゆる教材、機材は日本を何度も往復して友人、知人の援助を受けました。ジャカルタ在住のインドネシア語科の同期生、後輩、教え子の皆さんのご好意も忘れることは出来ません。



パダンの郊外にはこんな伝統家屋も

苦難の道

ジャカルタと東京の国際交流基

金にも何回も足を運び、私立大学の重要性を話しました。しかし、返ってくる言葉はいつも「援助は国立5大学だけ」。今でこそブンハッタ大学は日本語科が有名になりましたが、当時は大学の存在も知られていませんでしたので、困難を極めました。

教材の援助と教師が日本での研修を受けられるようになったのは4年後のことでした。それも年々学生数が増え数百人になり、日本語能力試験も好成绩を収めた結果だと思います。大学側がすべてを任せてくれたのは、有難いことでした。

私が目標としたのは、単に日本語を教えることだけではなく日本文化、日本人の考え方、日本人の心を伝えることでした。インドネシア語を専攻していなければ、大学側との交渉もミナンカバウ族の風俗習慣も乗り越えられなかったと思います。

「Disiplin tetapi Adil」に教えられたものと信じています。

恩返し

そもそも私がインドネシアで日本語教育に携わりたいとの思いを持ったのは、1956年のアジア・アフリカ・バンドン学生会議（Konperensi Mahasiswa Asia Afrika）以来のことです。日本から女子学生代表としてただ一人出席いたしました。1ドルが360円の時代で、大学生として渡航費200万円は不可能でした。

応援して下さった外大生の街頭募金や、新聞報道で多くの方の寄付を頂き、実現出来ました。滞在中もホームステイはもちろん、大勢のインドネシアの方にお世話になりました。それ以来、いつかは両国のために役立つことで恩返



マカッサルの街の風景



東ジャワのブロモ山



プンハッタ大学日本文学部の文化祭 =04年5月6日

しをしたいという思いを抱きながら、インドネシア語と日本語教育を続けました。

幸い長年の夢が叶いインドネシアの東と西、マカッサルとパダンで日本語の「一粒の種」を植えることが出来ました。

パダンには毎年日本語弁論大会を開催するため賞品、賞金持参で訪れています。50人から始めた日本語学科も、今やスマトラ全島からやって来て600人になっています。3年制の短期大学でスタートしましたが、現在は5年制大学となっています。基礎から日本語教授法を指導した先生達も、日本で研修を受け立派に育ちました。

認められ

2001年4月にプンハッタ大学創立20周年を記念して表彰状と金バッジを授与されました。外国人としては初めて。帰国後こ

んなにも早く功績が認められることは稀有なことで、大講堂の壇上からインドネシア語で挨拶をして大拍手を受けたときは、一冊のテキストから揃えて孤軍奮闘したことを思い出し、感無量でした。

現在パダン市にも近隣の町にも日本語学校が増えました。先生の多くは教え子達です。スマトラだけではなくジャワ島やスラウェシ島の各地でも日本語を教えています。

日本語教育を通して日本とインドネシア両国の国際交流に貢献出来たことを嬉しく思っています。

冒頭の写真は47年ぶりに訪れたバンドンのホテル。AA会議出席のため泊まった時は南国情緒あふれる小さなホテルでしたが、今はすっかり近代的なホテルになっていました。

私が一番初めに使ったインドネシア語が「Minta Air Panas」。マンディのためにバケツにお湯を運んでもらいました。ボーイさんが何に使うのか訝って「Hati hati ya, Nona」と言ってくれたのを思い出します。



りんごのビール!?

在学中に1年弱、インドネシアに滞在。今はインドネシアに工場のある自動車部品メーカーで働いております。

今年のゴールデンウィークに、インドネシアを訪れました。遊び目的の訪問は3年ぶり。卒業後、仕事では何回もお邪魔していたのですが…。そのときは見落としていた細かい変化に、今回気づくことができました。2,000ルピアだった学食のナシゴレンが4,500ルピアになっていたり、ショッピングモールにタッチパネル式の情報端末があったり。情報端末は、観光情報を入手できるのはもちろん、音楽の試聴までできるという優れものでした。

中でも一番心に残ったのが、ノンアルコールビール「ビantan・ゼロ」の存在。みなさまご存知の、ビantanビールの姉妹品です。こんな気の利いたものが売られるようになるなんて、インドネシアもずいぶん変わ

ったなあ、としみじみ。キャンペーン用のジョッキを手に入れるため、3本購入し、すべて日本に持ち帰りました。

日本でノンアルコールビールと呼ばれているもの

は、わずかながらアルコールが入っています。それに対し、このビantan・ゼロは、文字通りノンアルコール。リンゴの甘味料が入っており、ここでも差別化を図っているようです。ビールでありながら、

リンゴの味を楽しめる。意外性で勝負、ということでしょうか。ちょっと苦めのファンタ・アップル、なんてたとえば野暮なのでやめておきます。何はともあれ、インドネシアのメーカーがこういうおしゃれ?なものを作っていますよ、というご報告でした。

ちなみに、ふつうのビantanなら日本の百貨店で買えますが、今のところゼロの方は見つかりません。

(里 真吾 '02卒 大50)



みんなで上へ!!!

インドネシアが独立60周年を迎えた05年8月17日、各地で独立記念日を祝う催し物が開かれました。クルブック(インドネシアの揚げせんべい)早食い競争、綱引き、バドミントン大会など様々なイベントがありますが、見物客が最も楽しめるイベントのひとつがLomba Panjat Pinang。

ルールは簡単。樹皮を剥ぎ、オイルをたっぷり塗った6-7mのビンロウジュ(檳榔樹)の幹のてっぺんに吊り下げられた賞品を目指して、5-6人の男性が1チームとなって競争をします。チームごとに工夫をしますが、木の幹がオイルですべるためなかなかうまくいかず、見物していても非常に楽しめます。



この競技には、国民が協力して闘えばその結果独立を勝ち取ることができる、という意味が込められています。だから、8月17日なのです。

でも、ビンロウジュの木が、競技のために大量に伐採され、年々入手が難しくなっているそうです。競技にうってつけなのは高さ8-12m、周囲が43-50cmのビンロウジュ。木の成長が遅く、理想の大きさになるまで30年ほど。大量伐採をしながら、栽培や山の復興には関心が薄く、ほとんど植樹がされていません。

伝統的な競技が、いずれ姿を消してしまいそうです。そうなる前に、植樹の大切さに気づく人が増えていってほしいのですが。

(芝田亜希 '03卒 大51)

会の運営は「協賛金」で

!!

南十字星会は、これまでから会費を徴収しておりません。今回、会則を見直すに当たって、幹事会で協議



した中でも「会費なし」の従来方針を確認しました。しかし、活動を活発に展開して行くには、運営費ゼロではとてもむずかしく、例えば連絡・郵送費だけでも経費がかさみます。

そこで、寄付の形で「協賛金」をお願いするようになりました。会則の条文にも盛り込み、幹事会で承認されました。具体的には、協賛金は1口2,000円。何

ご協力をお願いします

口でも結構です。会報「南十字星」の発行に伴う経費もこの協賛金から充当させていただきます。

趣旨をご理解いただき、ご協力をよろしく願います。皆さまのお気持ちを無駄にしないよう、会報につきましては“手づくり”で、今後ますます充実を目指して頑張りますので、ご支援ください。

協賛金の郵便振込先は以下の通りです。

口座名称は「大阪外国語大学 南十字星会」

口座番号 00900-9-278638

振込用紙を同封します。用紙の「通信欄」に、近況・ひとこと・メッセージなどをお書きいただければ幸いです。会報の第2号（'06年4月発行）以降に、会員の情報をたくさん紹介できるコーナーを設けます。「通信欄」のご活用もお願いします。

「南十字星会」会則

- 第1条(名称) 本会は南十字星会(以下本会という)と称する。
- 第2条(所在地) 本会の事務局を、〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8丁目1番1号 大阪外国語大学同窓会内に置く。
- 第3条(目的) 本会の目的は
 会員間の相互連絡
 懇親会、歓迎会等の開催
 会報等の出版物の刊行、母校の行事等の情報の提供
 その他、慶弔や必要と認められる事柄の対応、活動
- 第4条(会員) 本会の会員は、大阪外国語学校(馬來語部)、大阪外事専門学校(インドネシア科)、大阪外国語大学(インドネシア語学科、専攻語インドネシア語)の卒業生とし、特別会員として母校の現・旧教職員とする。
- 第5条(役員と職務) 本会に次の役員を置き、職務は次の通りとする。
- | | | |
|------|-----|-----------------------------|
| 会長 | 1名 | 会務を掌理し、本会を代表する |
| 代表幹事 | 1名 | 会長を補佐し、会長に事故ある時は、会長の職務を代行する |
| 幹事 | 若干名 | 会長に助力し、会務を処理する |
| 会計 | 1名 | 会計事務を処理する |
- 第6条(役員の任期) 役員の任期は2年とする。但し、再選を妨げない。
- 第7条(運営) 会長は、必要に応じ幹事会を招集する。
 定例総会は2年に1回開催し、重要事項等を審理する。必要に応じて、臨時総会を開催することができる。
- 第8条(会費) 会費は徴収しない。但し、寄付の形で協賛金をお願いし、会の運営や会報発行等に伴う経費等に充てる。協賛金は1口2,000円とする。
- 付則 本会の会則は、平成17年4月10日から適用する。